

報告

平成21年度

北海道医師会賞・北海道知事賞

受賞者業績紹介

前号9月(第1092)号にてご紹介いたしましたとおり、9月26日(土)午後3時より、札幌グランドホテルにおいて、北海道医師会賞・北海道知事賞贈呈式が挙行されました。

ここに受賞された方々のご業績を紹介いたしますとともに、受賞者各位の一層のご活躍を祈念いたします。

—学術部—

平成21年度 北海道医師会賞・北海道知事賞受賞者

医師会名	受賞者職氏名	研究(業績)題名
札幌市	札幌一条クリニック 院長 後藤 康之	いわゆる難治性慢性疼痛の治療に関する研究
北海道大学	北海道大学病院 教授 浅香 正博	ヘリコバクター・ピロリと胃癌の関わり—除菌による胃癌予防の試み
	北海道大学大学院医学研究科 精神医学 教授 小山 つかさ	精神疾患の病態と向精神薬の作用機序に関する研究
札幌医科大学	札幌医科大学医学部 産婦人科学講座 教授 斎藤 つよし	子宮体癌の発生メカニズムに関する研究
	札幌医科大学医学部 皮膚科学講座 教授 山下 としはる	皮膚癌の病態、診断および治療の研究
旭川医科大学	旭川医科大学医学部 微生物学講座 教授 若宮 伸隆	コレクチンファミリーの発見とその機能解析
	旭川医科大学病院 呼吸器センター 教授 大崎 よし伸	呼吸器領域での診療、研究、教育

北海道医師会賞・北海道知事賞

いわゆる難治性慢性
疼痛の治療に
関する研究



札幌一条クリニック

院長 後藤 康之

後藤康之先生は、昭和36年に北海道大学医学部を卒業後、北海道大学医学部麻酔科に入局し、昭和43年に医学博士の学位を授与され、昭和47年から63年まで助教授として麻酔学やペインクリニックの研究と、教育、臨床に貢献されました。

昭和63年7月から札幌ひばりが丘病院院長、平成4年から札幌恵北病院院長、平成8年から松前記念クリニック院長、平成9年から滝川中央病院副院長を歴任されております。平成10年8月からは、札幌一条クリ

ニックを開業され、これまでの豊富な臨床経験を生かした第一線の臨床医の立場から、ペインクリニックの臨床と啓発、後進の指導に尽力されております。

現在に至るまで、一貫して麻酔学やペインクリニックの研究と臨床に携わって来られ、痛みに悩む患者を救うべく、疼痛治療の第一人者として全国で活躍されております。

また、学会活動においては国内外で研究成果を多数発表され、シンポジストとしても活発な活動をされております。

さらに、各医療機関との連携を図るべく、札幌市麻酔・ペインクリニック医会を立ち上げ、会長として札幌家庭医学講座による市民への啓発や、講演会等による会員の教育活動にあたられており、麻酔・ペインクリニック領域の専門的な立場から、多岐に亘って活動されております。

以上、先生は研究家・臨床家としてさらなる発展が期待されております。

ヘリコバクター・ピロリ
と胃癌の関わり
— 除菌による胃癌予防
の試み



北海道大学病院

教授 浅香 正博

浅香正博教授は、ヘリコバクター・ピロリのわが国の年代別感染率を初めて明らかにするとともに本菌の感染と胃粘膜萎縮との関わりを証明した。次いで、本菌と胃癌、特に早期胃癌との関わりを明らかにした。この論文に使用された図はSapporo studyとして米国消化器病会議の教育テキストに採用されている。1996年から2000年にかけて、文部省の科学研究費がん重点研究“ヘリコバクター・ピロリと胃癌の発生”班の班長としてヘリコバクター・ピロリと胃癌の関わりを疫学的観点から明らかにした。1997年米国ワシントンDCにおいて開催された米国のヘリ

コバクター・ピロリコンセンサス会議にわが国からただ一人招待され、ヘリコバクター・ピロリと胃癌について講演し、レビューとしてGastroenterology誌に発表した。2000年、2004年に開かれた欧州ヘリコバクター会議のコンセンサス会議でもヘリコバクター・ピロリと胃癌のセッションの責任者として、欧州のヘリコバクターガイドライン作成に貢献した。わが国においても日本ヘリコバクター学会ガイドライン作成委員会委員長としてわが国最初のガイドラインを作り上げた。

また、浅香教授は、JAPANGAST Study Groupという大学、病院にとらわれない臨床試験を行うためのグループを作り、ヘリコバクター・ピロリ除菌が早期胃癌内視鏡手術後の二次胃癌の発生予防が可能か否かの試験を開始した。2008年8月、除菌群は非除菌群に比して二次胃癌の頻度は約1/3に減少したという研究結果をLancetに報告し、海外でも大きな反響を呼んでいる。この研究成果をベースにして除菌と検診を組み合わせた新しい胃癌予防法の開発が進むことが期待される。

精神疾患の病態と 向精神薬の作用機序に 関する研究



北海道大学大学院医学研究科精神医学

こ やま つかさ
教授 小 山 司

小山 司教授は、現在までに気分障害、不安障害、統合失調症などの病態解析ならびに向精神薬の作用機序に関する基礎および臨床研究で数多くの業績を挙げている。

気分障害においては、セロトニン神経と視床下部-下垂体-副腎系(HPA)の活動性の関係に注目してきた。その活動性を知る指標として、セロトニン刺激による血小板内カルシウム濃度測定を行い、双極性障害では特異的に濃度上昇が引き起こされているこ

とを明らかにした。

また、最近ではうつ病の病態、抗うつ薬の奏功機序に海馬の神経細胞新生が関連することを示し、そのメカニズムとともにHPAの活動性との関連を探求している。対人恐怖を不安障害の診断概念の中に確立し、その治療法として選択的セロトニン再取り込み阻害剤(SSRI)の有効性を見いだした。そして、その生物学的基盤としてSSRIが扁桃体における神経活動を減弱させることを基礎研究で明らかとした。統合失調症の病態解析としてメタアンフェタミンの慢性投与によるモデルラットを用いて、ドーパミンおよびグルタミン酸の過剰放出、アポトーシスが病態進展に関与することを明らかとした。また、Binding assayを用いることで多くの抗精神病薬のプロフィール解析を行い、非定型抗精神病薬が5-HT₂受容体に高親和性を示すことなどを明らかにし、現在、多くの臨床場面で活用されている。

子宮体癌の 発生メカニズムに 関する研究



札幌医科大学医学部産婦人科学講座

さい とう つよし
教授 齋 藤 豪

齋藤 豪教授は、昭和61年札幌医科大学を卒業後直ちに同大学院に入学し、産婦人科学講座・橋本正淑教授ならびに病理学第二講座・森道夫教授の指導により細胞接着蛋白に対するモノクローナル抗体を作成し学位を取得した。

その後、市立釧路総合病院、道立江差病院などで地域医療に従事した後、フランス・リヨンにある世界保健機関(WHO)・国際癌研究所(IARC)に訪問研究員として留学し、細胞接着蛋白の一つである

ギャップ結合を構成する蛋白であるコネキシンの研究に取り組み、これが多くの細胞で発癌に抑制する働きをすることを解明した。さらに、子宮体癌の発癌機構の研究に取り組み、女性ホルモンの一つであるエストロゲンがコネキシンの発現を抑制することによって、子宮内膜癌の発癌に促進的に働いていることを解明した。帰国後も札幌医科大学産婦人科学講座でこの研究をすすめる。近年ではこれらのコネキシンのよってもたらされる細胞間コミュニケーションが、遺伝子治療の効果を増加させるバイスタンダー効果を生み出すことを子宮体癌でつきとめた。平成16年には日本産婦人科学会総会のシンポジストに指名され発表している。

これらの基礎的研究成果を基に、近年増加しつつある若年性子宮体癌に対する高用量黄体ホルモン療法と内視鏡を組み合わせた子宮温存療法に積極的に取り組んでいる。

皮膚癌の病態、診断 および治療の研究



札幌医科大学医学部皮膚科学講座

教授 やま した とし はる
山 下 利 春

山下利春教授は昭和53年に札幌医科大学を卒業後、同大学大学院（癌研究所分子生物学部門）に入学し、藤永 恵教授のもとでDNA腫瘍ウイルスの研究により学位を取得した。その後、札幌医大癌研究所でヒトパピローマウイルスの検出法の開発、皮膚癌に関係するHPV5型・8型のウイルス癌遺伝子の解析、癌抑制遺伝子p53の構造と機能の研究などに従事した。また、この間、多数の大学院生の学位論文の指導を行った。

平成10年4月より、札幌医大皮膚科学講座の講師となり、平成14年より同講座助教授、平成19年6月より同講座教授となった。皮膚科では前任の神保孝一現名誉教授のもとで、皮膚癌とくにメラノーマの分子生物学とメラノーマの診断および治療の研究を行い、メラノーマ細胞にアポトーシスを誘導あるいは抑制する遺伝子の同定と解析、メラニン合成関連蛋白質の構造と機能の解析を行った。これらの研究は、その後のメラノーマ治療の橋渡し研究の基礎となった。臨床研究では、平成17年12月に先進医療として認可されたメラノーマのセンチネルリンパ節生検、色素性病変のダーモスコープ診断、皮膚癌の先進的化学療法の導入に尽力した。

山下教授は、現在、高齢化社会を迎えて増加しつつある皮膚癌に対し、ガイドラインに沿った標準的治療に加えて、化学療法、サイトカイン療法、細胞免疫療法など個別化治療の確立を目指した基礎的および臨床的研究を進めている。

コレクチンファミリー の発見とその機能解析



旭川医科大学医学部微生物学講座

教授 わか みや のぶ たか
若 宮 伸 隆

若宮伸隆教授は、ウイルスインヒビターの研究から、動物の血中に存在するコレクチン分子が、長らく明らかにされていなかった内因性ウイルス感染阻止因子βインヒビターであることを明らかにしました。次に、血中に存在する“古典的コレクチン”であるコングルチニンやマンナン結合レクチン（MBL）などの遺伝子クローニングを行い、多量体構造を有し、生物学的機能が保持された、効率が良い優れた

発見システムを樹立しました。その後、若宮教授は、血清中や肺胞分泌液に存在する“古典的コレクチン”とは、異なる3種の新規コレクチン遺伝子群（CL-L1, CL-P1, CL-K1）を、逆遺伝学手法を用いて遺伝子クローニングし、はじめて明らかにしました。

そして、これらの研究によりHUGOからコレクチン遺伝子ファミリー名の命名を委託され、*COLEC*と命名しました。その後、分子生物学的解析で、CL-L1分子はレクチンでは稀な細胞質に局在を示すこと、CL-P1は血管内皮に局在を示すスカベンジャー受容体として機能し血管内皮細胞において酵母などの微生物の異物排除に一義的に働くこと、CL-K1は古典的コレクチンに類似し肝臓や肺などの分泌細胞から血中に分泌されることなどを明らかにしました。

最近では、コレクチン分子の先祖遺伝子の研究や人を含めた動物の初期発生・分化などにおけるコレクチン分子の役割について研究を進めています。

呼吸器領域での 診療、研究、教育



旭川医科大学病院呼吸器センター

教授 おお さき よし のぶ
大 崎 能 伸

大崎能伸教授は昭和55年に旭川医科大学を卒業した後、医学部大学院に進学した。大学院では、抗癌剤の肺癌細胞に対する作用機序の解析を研究テーマとした。大学院修了後は、肺癌の診療と基礎・臨床研究を中心に、呼吸器疾患全域にわたって研鑽を重ねた。昭和59年に旭川医科大学第一内科助手、平成9年に第一内科講師、平成17年に呼吸器内科長を任せられた後、平成20年に旭川医科大学での呼吸器診療部門として呼吸器センターが創設されて、初代教授となった。

診療面では、肺癌の全国的な大規模臨床研究に早くから参加し、小細胞肺癌の新しい治療の開発、非

小細胞肺癌の治療の進歩に結びつく研究に貢献した。また、呼吸器疾患でのコモンディージーズの診療の普及に尽力した。さらに、理論的な抗菌薬の使用法や、起炎菌の薬剤感受性を念頭に置いた呼吸器感染症の治療を解説してきた。研究面では、肺癌の生物学的特性を明らかにすることで、新たな治療戦略に結びつく基礎研究を展開してきた。その中には、epidermal growth factor (EGF)受容体の高発現が肺癌での予後不良因子であること、bcl-2とp53の発現が肺癌患者の生存期間に相関すること、カエルの皮膚から分離された抗菌ペプチドが抗癌活性を持つことなど、高く評価されている研究が含まれる。平成12年には自家蛍光を内視鏡で観察する蛍光観察装置PDS-2000を開発し、その装置を用いた臨床研究を行った。

教育面では、呼吸器疾患について理解しやすい講義を行い、呼吸器専門医を目指す医師の増加に貢献してきた。

これら一連の業績により、呼吸器学会、肺癌学会など主たる呼吸器関連学会で、幹事、評議員、委員などの重要な役職を歴任している。

北海道医師会サポートセンターのご利用について

◇情報広報部◇

北海道医師会サポートセンターでは、本会提供のメールアドレスに関するご相談だけでなく、パソコン操作やインターネット利用に関する質問対応も承っております。日頃のパソコン利用におけるちょっとした疑問点やトラブル対応の第一相談窓口として、お気軽にご利用ください。

お問い合わせ例

パソコンをMacに変えたら使い方がよくわからない・・・ご利用方法をご案内
プロジェクターでパソコンの映像を映したい・・・ご利用方法をご案内
光電話ってどうしたら使えるの・・・光電話についてご案内、取次ぎも可能
エクセルの使い方がよくわからない・・・一般的な使い方であればご案内可能
サポートに来てほしい・・・駆けつけ業者を手配します(有料となります)

お問い合わせ先：北海道医師会サポートセンター（平日 8:30～12:00、13:00～17:30）

○TEL： 011-738-3401

○E-mail： support@hokkaido.med.or.jp